

盆子原秀三, 山本澄子 著

印象から始める歩行分析—エキスパートは何を考え、どこを見ているのか？

江原義弘 (新潟医療福祉大学)

この本は著者の盆子原秀三氏が Kirsten Götz Neumann 氏の講演に触発され、歩行介入を効果的に実施してほしいと願い、長年にわたる臨床での試行錯誤を凝縮して意欲ある理学療法士たちのために書籍化したものである。

私は 2001 年ごろに英国で開催された動作解析装置のソフトウェア講習会で Kirsten 氏と知り合い、彼女が米国の Rancho Los Amigos National Rehabilitation Center を拠点とする歩行分析講師の会 (O.G.I.G.) の会長として講演活動をしていることを知った。彼女に誘われてドイツでの講演会に参加したところ、その講演の内容が日本の理学療法士に必要なものであることを確信し、彼女を日本に招待し山本澄子氏らとともに日本各地で「観察による歩行分析セミナー」と称した講演会を開催した。講演は大評判となった。この講演に刺激を受けたのが月城慶一氏であり、彼は Kirsten 氏が出版したばかりのドイツ語の著書『Gehen verstehen : Ganganalyse in der Physiotherapie』をあっという間に和訳した。同様に彼女に大いに刺激を受けたのが盆子原氏である。彼も 2003 年に東京の両国で Kirsten 氏の講演会を主催し、著書『観察による歩行分析』(医学書院)の訳者にも名を連ねた。

今回の著書は盆子原氏の思いがぎっしり詰まっている。序文と第 1 章ではなぜ「印象」を取り上げたかの経緯と、歩行の相を「荷重の受け継ぎ」、「単脚支持」、「遊脚前進」という機能的課題として認識する重要性が述べられている。この 3 つが本書の根幹である。歩行では、この 3 つで動きのパターンは大きく変化するが、この 3 つの相をまたがって身体はよどみなく進行していく。よどみがあると印象が大きく変化する。この印象を分析の糸口にしようとする試みが本書である。第 2 章は歩行のメカニズムについてのおさらい。よく知られている内容の復習な

ので平板。第 3 章「分析に必要な観察の視点」は本書のメッセージの導入部なのであるが、「1. 観察による歩行分析に関する文献的な考察」、「2. 観察による歩行分析に影響を与える要因」、「3. 観察しやすい 3 つの部位」が記載されており、一般論の記載なのか、氏の訴えたいメッセージなのかその意図が不明確。4. でいよいよ「各歩行相における機能的な意義について」記載がある。前述した 3 つの機能的課題を軸として、各相でのクリティカルイベントとその機能的意義が詳細かつコンパクトにまとめられており、氏の思い入れがうかがえる力作である。ただ「印象」と関連付けようとする意図は感じるが、必ずしも効果的に生きているとはいえない。

第 4 章の「1. 逸脱した動きの主原因とその分析」は本書の最初の山場である。各相での逸脱した動き、主原因と副次的な動き、分析(方法)が表形式できわめてコンパクトにまとめられており圧巻。逸脱した動きを捉えた後に初心者が行うべきことは、最も可能性のある原因を決定するために可能性のあるすべての原因の列挙することであり、この章はきわめて有用。第 5 章「データ・フォームによる分析」、第 6 章「観察カードによる分析」には、初心者が効率的に分析手法を身につけるための 2 つの手法の詳細が述べられている。これが本書の第 2 の山場である。

盆子原氏に影響を与えた Kirsten 氏が大切にしていたのは、治療効果をすぐに出すことである。それは、効果を対象者に実感してもらうことが対象者のモチベーションを上げるからである。多くの理学療法士が本書で少しでも早くそれを実現できることを願っている。

(B5・頁 152 2018 年 定価: 本体 4,000 円 + 税 [ISBN978-4-260-03590-3] 医学書院刊)